

## 第 65 回 歴史リレー講座「長屋王家木簡と片岡」 馬場 基氏 (R2.2.16)

奈良時代初頭に長屋王が政治のトップとして活躍するより少し前の時代、中国大陸では数百年にも及ぶ内乱が収束し、隋・唐という大帝國が成立しました。大帝國が成立すると、必ずと言っていいほど周辺國が危険にさらされます。実際、朝鮮半島では高句麗、新羅、百濟が次々と滅びました。唐の敵國であった日本も白村江の戦い（663 年）で惨敗。こういった流れの中で、平和な時代に落ち着く前の段階が長屋王の時代でした。混沌とした情勢の中、誰が中心となって政治の舵を取るのか、世界の中で生き延びるのためには世界標準の道を選ぶのか自國のやり方を貫くのかなど、先は見えず國の課題は山積していました。

絶大な権力を誇った長屋王は、壬申の乱（672 年）で天智天皇に勝利して近江から大和に都を戻した天武天皇の孫であるとともに天智天皇の孫でもあります。父の高市皇子（天武天皇の子）も優秀な政治家でした。文句のつけようのない血筋と実力を兼ね備えた長屋王は、聖武天皇にとっては心強い一族であると同時に自身の地位を脅かす要注意人物でもありました。神龜 6 年（729）、長屋王は藤原氏の密告により天皇から謀反の疑いを掛けられ自死に追い込まれます。そうはいつでも、『続日本紀』には長屋王を誣告した人物の記載があるので、政治的な陰謀により濡れ衣を着せられたあげく抹殺されたというのが真相のようです。『続日本紀』は、長屋王の遺骸は生駒山に埋葬された、と伝えます。

『日本靈異記』には、ある僧の卑しいふるまいに激怒した長屋王が笏<sup>しゃく</sup>で頭を殴打したという事件が見られます。仏法や規律を守り抜く彼の厳しい一面が窺える逸話です。その一方で、長屋王は唐の僧に千枚もの袈裟を寄贈しています。生地には「お互いの風景は違えども唐と日本には縁がある」という意味の刺繍が施されていました。この善意が鑑真を感激させ、来日（779 年）を決意させたともいわれます。鑑真の来日には、長屋王の存在に加えて、日本が元来、聖徳太子を輩出するような仏法に縁が深い國であったことも大きく影響しているようです。

長屋王邸宅跡の発掘調査では 3 万点を超える木簡が出土しました。洗浄、整理した木簡は保存液に浸され、その後、自然科学的な保存処理を終えた木簡は桐のたんす（温度 20℃湿度 60%）で保管されます。長い年月を経ても土中で木簡が腐らないのは多量の水分のおかげです。その半面、土中では酸素や紫外線の影響を受けないため、出土物をいったん外に出せばたちまち劣化が進みます。発掘現場では慎重さとともに手早さも必要とされる所以です。また、木簡は紙と違って丈夫で、薄く削れば修正や再利用も可能です。部分的に漢文が使われており、当面の情報伝達に活用されていました。その内容は業務報告や役人の呼び出しだけでなく、宿直の当番名、警備の配置、税の詳細、日々の雑記など多岐にわたっていました。

木簡研究により、奈良時代の貴族も領地を所有していたことが明らかになっています。長屋王の場合、その膨大な領地の多くは父から受け継いだものでした。実は、王寺町周辺は長屋王と深い関わりがあります。長屋王の領地のなかでも重要なのが片岡司です。近くの馬見丘陵には天皇家の土地があり、農作物の栽培にも最適なことから特別視されたようです。木簡には片岡司から納められた農作物の内容（カブラナ、桃、蓮葉、ヌナハ＝ジュンサイ、アザミなど）や関係者名（道守真人など）<sup>おちりのまひと</sup>だけでなく、都まで運んだ人の名も見えます。木簡に文字が書かれた場所が片岡なのか都なのかも興味深く、今後の研究が期待されます。

全国に多数の荘園を抱える長屋王にとって、大和盆地の片岡は大和川を下って瀬戸内海航路へ、ひいては朝鮮半島へ直結する重要拠点という意義があったのではないのでしょうか。しかし、このことが却って聖武天皇の懐疑心や恐れを増大させ、長屋王の変に至ったのは皮肉なことです。